



👁️👁️ みどころ

私の大好きだった女子テニスの伊達公子は世界第4位まで進んだが、全盛期のビーナス&セリーナ・ウィリアムズ姉妹には全く歯が立たなかった。そんな“化け物”のような美人黒人姉妹の“誕生秘話”が、ここに登場！

娘が生まれる前から、78ページの“ドリームプラン”を作成！？それはいかにもウソっぽいから、私は原題の『KING RICHARD』の方が好き。

信念の持ち方とハッタリを含む抜群の実行力において、このオヤジはただものではない！巨人の星こと星飛雄馬をスパルタ教育で誕生させた父親も偉かったが、あれは作り話で、こちらは実話だ！

私は、とりわけ「負けても大成功！」のラストに注目！なるほど、これもあり！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■全盛期のこの姉妹は圧巻！キング・リチャードとは？■

男子テニスに比べれば、女子テニスの迫力やスピードが劣るのはやむを得ない。しかし、それを補って余りある魅力は、女性特有の美しさとファッション。それは女子テニスに限らず、女子ゴルフでも女子フィギュアでも同じだ。

日本では現在、大坂なおみ選手が大活躍だが、日本が誇る、かつての女子テニスの美人プレイヤー、伊達公子も、全盛期の1995年には世界ベスト4まで進んだことがある。しかし、あの時代、彼女の前に立ちはだかつていた巨大な壁が、ビーナス&セリーナ・ウィリアムズ姉妹だった。この姉妹は、2人合わせてグランドスラム（テニス世界4大会）30回優勝と、5つの金メダル獲得という輝かしい功績を残している。彼女らのスピードは女子テニスとは到底思えない強烈なものだったからその成績も当然だが、2人はなぜそんな選手に育ったの？

本作の原題になっている『KING RICHARD』とは、ビーナス&セリーナ姉妹の父親、ウィリアム・リチャードのこと。日本で有名な「巨人の星」こと星飛雄馬の父親・星一徹は「キング一徹」とは呼ばれないが、この姉妹の父親はなぜ「キング・リチャード」と呼ばれているの？それは、ドリームプランを立てて実行したから。

■□■78ページのドリームプランとは？これってホント？■□■

原題を『KING RICHARD』とする本作の邦題が、なぜ『ドリームプラン』に？それは本作導入部で、リチャード（ウィル・スミス）が何度も、「俺はふたりの娘を世界チャンピオンにする78ページの計画書を書いた。ふたりが生まれる前にね。」と語り、彼特有の弁論術と実行力でそれを実現しようと奮起するからだ。リチャードは、優勝したテニスプレーヤーが4万ドルの小切手を受け取る姿をテレビで見て、テニス未経験ながら、姉妹が生まれる前から「世界王者にする78ページの計画書」を独学で作成したらしい。そのため、ギャングがはびこるアメリカ・ロサンゼルス南部のコンプトンに住み、お金もコネもなく、練習をするのも劣悪な環境下で、彼は着々とその計画を実行に移していた。それが本作導入部の展開だが、それってホント？

本作は、『ロッキー』シリーズと同じような単純な成功物語（？）だが、違うのは、前者は架空の物語だが、本作は実話だということ。また、父親が鬼コーチとして自分の子供に接するのは『巨人の星』も同じだが、そこでも違うのは、架空の物語か、実話かということだ。本作は、娘が生まれる前に書いた78ページの計画書を「ドリームプラン」と祭り上げた上、それを邦題にまでしているが、ほんとにそんなことが可能なの？

ビーナス&セリーナ姉妹が本格的なテニスプレーヤーに成長していくについて、本作には、ポール・コーエン（トニー・ゴールドウィン）と、リック・メイシー（ジョン・バーンサル）という実在する2人のコーチが登場するが、リチャードが彼らと巡り合えたのは偶然のはず。まさか、娘が生まれる前に書かれた78ページの「ドリームプラン」の中にそれが書かれていたとは到底思えない。裁判は証拠に基づかなければならない。そう教え込まれ、それを50年近く実践してきた私には、「ドリームプラン」の存在は認めても、そこに本作のストーリーのようなことがすべて書かれていたとは到底信じられないが・・・。

■□■この教育方針は特異！その是非、賛否は？■□■

本作の主人公は原題どおりキング・リチャードだが、妻のオラシーン（アーンジャニュー・エリス）も、節目節目で大きな役割を果たすので、彼女にも注目！私がビックリしたのは、リチャードとオラシーンは再婚だが、オラシーンには前夫との間に既に3人の連れ子（娘）がいたこと。本作ではその事情に深入りしないが、ドリームプランのスタートはリチャードが1977年のテレビで、女子テニスのプレイヤーが4万ドルの小切手を手にするシーンを見たとき。その瞬間に、リチャードはオラシーンに対して、「娘を2人作ろう。そしてテニスをさせるんだ」と叫んだそうだから、すごい。

プラン作りが得意なリチャードのことだから、78ページのドリームプランの中にはテ

ニスのことだけではなく、娘の教育方針も明確に書かれていたらしい。オラシーンの3人の連れ子を含む5人の娘たちに対するリチャードの教育方針の基本はすべてにベストを尽くすこと。オラシーンの3人の連れ子たちは弁護士や看護師を目指して勉強一筋に励んだそうだが、テニスのプロ、しかもそのトップを目指すとした2人の娘にも、テニスだけでなく学校の成績でもトップを取ることを求めたからすごい。

いわゆる“文武両道”をとことん求めたわけだが、そんな教育方針は特異。そもそもその是非、賛否は？しかも、私に言わせれば、ドリームプランに書いたそんな教育方針はあくまで机上の空論だ。反抗期や思春期を含めて、そうそううまくいくものではないだろう。私はそう思っていたが、アレレ、スクリーン上では・・・？

■□■良き指導者（コーチ）が不可欠！その人選は？実践は？■□■

プロボクシングにおける亀田興毅、亀田大毅、亀田和毅の亀田三兄弟はすごかったが、そこで特異なのは、3人のコーチが実の父親だったこと。しかし、リチャードの場合はそうはいかないから、彼の最大の任務は良き指導者（コーチ）の指導を受けさせることだ。『ロッキー』シリーズのロッキーも、『あしたのジョー』の矢吹丈も、しがないコーチ（？）のもとで立派に成長したが、それは例外。ドリームプランの中には明確に「立派なコーチを選び、つけること」と書かれていたはずだ。本作中盤は、そんなドリームプランどおりのストーリー展開になっていくところが面白い。

現在のウクライナ情勢を見ていると、ゼレンスキー大統領の意外な頑張り（？）と意外な能力（？）が際立っているが、本作でもコーチ選任におけるリチャードの外交能力、交渉能力の見事さが際立っている。最初のポール・コーエンとのコーチ契約だけでもリチャードには過ぎたものだが、指導方針の違いからコーエンと手を切ったリチャードは、次にはリック・メイシーのテニスアカデミーに強引に2人を導いたからすごい。そこには、既にジュニアのトップ選手として君臨しているアランチャ・サンチェス・ピカリオの姿もあった。さあ、2人はそこでの練習で、いかに成長していくの？

■□■ジュニアでの躍進を持続？中断？この決断は見事！■□■

伊達公子は26歳でいったん引退したものの、11年半のブランクを経て現役に復帰し、47歳まで日本テニス界を牽引した。マルチナ・ナブラチロワも50歳まで頑張った。それに対して、マルチナ・ヒンギスは12歳からジュニアの大会で頭角を表すと、たちまち大人たちに混じってグランドスラムで活躍するまでに成長したが、残念ながら22歳で引退してしまった（24歳で復活）。また、本作には、13歳でプロデビューし大活躍したジェニファー・カプリアティが万引きやマリファナ所持等の事件を起こして逮捕されるニュースも登場する。

1989年に9歳でジュニア大会に初出場したビーナスは63連勝と無敵。これにはリチャードはもちろん、リックも大喜び。こうなれば、ヒンギスが14歳でプロ転向したように、ビーナスもすぐにプロに転向し、ジュニア大会はもとより大人の大会でも大奮闘。

それがリックの描いた構想だが、そこでリチャードは、「もうジュニア戦には出場させない。学業に専念させる」と述べたから、リックはビックリ。そんなバカな！旬の間に多くの試合を経験し、実力を高めていかなければ！それがリックの判断だったが、根が頑固なりチャードはあくまで自説を貫いたからすごい。しかして、その決断の是非は？

■□■プロデビュー戦の期待は大！世紀の対決は？■□■

1976年のアントニオ猪木 VS モハメド・アリの異種格闘技戦は“世紀の凡戦”になってしまった。しかし、1612（慶長17）年の巖流島における宮本武蔵 VS 佐々木小次郎の対決は、実況中継こそなかったものの、日本全国の注目を集めたはずだ。事前予想では圧倒的に佐々木小次郎有利だったそうだが（?）、結末は意外にも・・・。

それに対して、『ロッキー』シリーズは、途中のストーリーは面白いが、クライマックスでの結論は最初からわかっている。つまり、打たれても打たれてもロッキーはKOされることなく死闘を繰り広げ、ボロボロになりながら最後には勝利するというものだ。

10代初めの伸び盛りの選手にとって、3年間のブランクはとてつもなく大きく、成長を止めてしまうのでは？多くの関係者はそう踏んだはずだし、私もそう思うが、リチャードの考え方は全く違っていらしい。その間、練習はたっぷりできたし、ちょっとした成功によって傲慢になったり、悪い誘惑に乗せられることもなかったから、順調。彼はそういうふうと考えていたわけだ。

しかして、ビーナスが89連勝を続けながら、1991年にジュニアへの不出場を決め、学業に専念してからの空白は丸3年。彼女の1994年プロ転向後のデビュー戦はバンク・オブ・ウェスト・クラシックで、対戦相手は当時最強のA・サンチェスだ。さあ、世紀の対決は如何に？

■□■負けても大成功！この結末に注目！■□■

勝てば世界に衝撃を与えることまちがいなし。すると、契約金の額は大幅アップするし、デビュー早々から大型のコマーシャル契約が舞い込むかも。スクリーン上では、試合開始前から既に有力メーカーから破格の契約条件が提示されていたが、ビーナスの唯一無二のマネージャーであるリチャードの対応は？これがどこまで計算づくなのか、それとも信念に基づくものなのかはわからないが、その対応はとにかくすごい。

試合は、開始早々からビーナスがサンチェスを圧倒！サンチェスのイライラぶりを見てみると、このままビーナスの勝利はまちがいなし！そう思っていたが、試合途中での“トイレ休憩”とその後の展開にビックリ！こんな制度があるの・・・？それが許された制度である以上、それに対応できず、その後ズルズルと得点を奪われたのは、一方ではビーナスの未熟さだし、他方ではサンチェスのしたたかさだ。しかして、結果はサンチェスの圧勝！これでは、リチャードの思惑は大きくズレ、契約金も大幅ダウン！コマーシャル契約もキャンセル！いやいや、そうではない。つまり、「負けても大成功！」というわけだ。

そんな感動的な本作の結末を、2人の熱戦からしっかり味わいたい。

2022（令和4）年3月18日記